

科学技術をおもう

名古屋大学 総長

平野 眞一

Shin-ichi Hirano
President of Nagoya University



21世紀初頭にあつて、学問・科学が迫られている課題はいよいよ明確になっている。急速に発達してきた科学技術は、人類の福利という「光」とともに、その生存を脅かす「影」をももたらしてきた。21世紀の学問・科学は、この「光」の面を進展させるとともに、「影」の面を制御して、全地球規模での持続可能な発展をはかるように展開することが必要である。

明治以来、欧米の近代科学・技術を導入しつつ、近代化を図ってきた日本は、必然的に「学ぶ」ところから入っていたために、独創性への認識が少なく、時には「真似る」ことを得意としてきたとよくいわれる。残念ながら、そのように指摘されても仕方がない面も多い。いまだに根強く残っている発想者のプライオリティーの軽視とどこかで実行されていなければ安心できないような意識からの脱皮が必要である。物質資源が乏しい我が国においては、独創的な学術研究活動を通して知を創造し、イノベーションを基とした産業活動を推進すべきであろう。それとともに、基盤を支える伝統的に強い（強かった）“ものづくり”技術の再強化が喫緊の課題でもある。

我が国の経済活動は回復基調にあるとはいわれているが、最近の石油価格高騰は新たな懸念材料でもある。このような状況では、ややもすると新技術開発が短期的視野で進められがちであり、真に競争力ある技術が開発できるか心配である。

そのためにも、言い古されていることであるが、独創的な発想を育てる土壌をつくり、挑戦心を養うことが必要であろう。幸い名古屋を中心とする東海の地には、弛まない努力の末に基礎技術を見事な「ものづくり」として結実させ、世界をリードする数々の企業を産んだ「ひと」を育成した風土がある。この風土を大切に伝承していきたい。

科学技術創造立国を標榜する我が国においては、本腰を入れて知の創造・活用をする「知の担い手」を育てなければならない。同時に、知を尊重し、互いの立場を理解しあった効果的な産学連携活動を一層進めな

なければならない。我が国が研究開発における国際競争力をさらに強化し、持続的に発展するためには、大学においては多様性に富んだ豊かな知的資源の蓄積に努めるとともに、「知」を国民・社会、また国際社会に広く還元し、共有しなければならない。そのためには、国を挙げて、知的基盤づくりに一層努力することが必要である。一方、科学技術に携わるものは、科学技術的好奇心を喚起し、世の中にその重要さを理解してもらうように、啓発に努めなければならないことは当然である。

私たちは、科学・技術が飛躍的に進歩し、その成果を享受することによって、物質的に豊かになった20世紀を過ごしてきた。それ以前の生活にはもう戻れない蜜を舐めてしまっている。今に続く持続可能な社会の構築には多くの困難さが伴う。人の営みに係る環境・資源・エネルギー問題については、要素還元的解析とともに俯瞰的視点からの全体論的また統合主義的な捉え方が必須である。また、世界をリードして進んでいる超高齢化社会においては、安心・安全で心豊かな質の高い生活を創造するための新たなシステムづくりのための研究と人材育成が重要である。これは新たに大学に課せられた重要な課題であり、また、全体論的な科学・技術のあるべき展開の姿でもあろう。

平野眞一（ひらのしんいち）氏 略歴

1965年名古屋大学工学部応用化学科卒業。70年同大学院博士課程（工学研究科応用化学専攻）修了。工学博士。70年東京工業大学助手、76年同助教授。この間71 - 72年ペンシルバニア州立大学リサーチアソシエイト、78年名古屋大学工学部助教授、83年教授、96年大学院重点化により大学院工学研究科教授（応用化学専攻）、99年高温エネルギー変換研究センター長、2000年名古屋大学評議員、02年先端技術共同研究センター長、03年から工学研究科長・工学部長。04年から名古屋大学総長。セラミックスのプロセッシング、微構造制御と機能発現について研究。アメリカセラミック学会フェロー、日本化学会学術賞、日本セラミック協会学術賞、Richard M. Fulrath賞など受賞。Academy of Ceramics、日本工学会アカデミーメンバー。趣味 アマチュア無線（JA2AXG）